



志和 ②

郷分



先月に続き志和。今回は郷分である。郷分には現在44世帯、109人が暮らしている。

志和地区の成り立ちや、地名の由来は先月号で述べた。浦分と郷分とに支配がわかれて、それぞれに庄屋がおかれることとなったのは、江戸初期である。海運で富を成してきたのが江戸期に入ってから浦分に対して、郷分は、農耕で成り立ってきた食料生産地であったため、集落としての歴史は古い。

志和は、急峻な山々を背にした海沿いの地区であるため、郷分の農地面積は、それほど広くないのではないかと思います。奥行きがかなりあるため、農地面積は広い。山を下り切って志和地区に入った所から、郷分の奥行きを眺めてみても、その奥行きが深さがわかる。また、坂を下る途中にヘアピンカーブがあるので、そこから下を見ると、志和川に沿って細長く伸びる郷分の様子がよく分かる。

今から700年以上前に、伊予難波郡からやって来た、河野氏一族である難波氏によって志和の支配が始まった。難波氏は、この地に来て志和氏を名乗り、現在の天満宮の北にある小高い山の上に志和城を築く。この城は、戦国期、長宗我部元親によって志和氏が滅ぼされる時に炎上してしまった。

志和氏は、山の麓の郷分に居(土



郷分は西へ西へと奥行きが深い

居)を構えた。志和川を渡った「ヒシヨウガ谷」というところである。また、家臣たちも、その近辺に住み農耕に励んだという。当時の地方武士はまだ兵農分離でない場合が多く、有事の際には武器を身につけ、主君のもとに馳せ参じるのであるが、平素は、自ら鋤を持ち、食料生産に従事していたのである。

郷分の産土神は、志和天満宮である。以前にも記したが「氏神様」というのは、特定の一族のための神様であることを指し、その土地とそこに住む人々を守る神様は「産土神」という。現在の志和天満宮は、地区を守る神様として存在しているので、産土神という位置づけであるが、この天満宮は、志和氏が京都の北野天満宮に願い出て、建立を許された社であり、長く志和氏の守り神であったため、そもそも成り立ちは氏神様であった。はじめは北野天神と呼ばれていたが、明治元年、天満宮と改称し、明治五年に正式に郷分の産土神となったという。

町のうごき		人口		前月比		出生		死亡		転入		転出		適正值(mg/l)		4月12日	
男	8,204	-52	男	4	14	52	94	リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下							
女	9,159	-68	女	2	17	42	95	硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下							
計	17,363	-120	計	6	31	94	189	アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下							
世帯数	8,523	-33					(3月中の届出)	アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05							
窪川地域 12,247人		大正地域 2,440人		十和地域 2,676人								化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下			

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部